

野口英世の生家について

公益財団法人野口英世記念会は、野口英世の生家を、野口英世が生まれた当時の姿を保持したまま、当時の場所で保存公開しています。日本全国はもとより世界各地から多くの人が訪れ、野口英世の生涯や業績を偲ぶ建物として大きい役割を果たしています。



当時の姿のまま残る生家

野口英世の生家は、1913（大正2）年ころには屋根が傾き、土台も腐食し、住むには危険な状態となっていました。野口家では、生家西隣りの空き家を購入して移り住み、生家は作業小屋として使用していました。

野口英世の生家の大きさは、桁行八間、梁行二間半（約128㎡）の寄棟造茅葺きです。間取りは広間型で東側に土間部（ニワ・ウマヤ・イナベヤ・カワヤ）、西側に床上部（オメエ・ザシキ・ナンド）を配しています。天井はなく屋根裏が露見しています。

1928（昭和3）年の野口英世の没後すぐに設立された野口英世博士記念会は、翌年、顕彰事業として生家の補修を行いました。さらに1938（昭和13）年に認可された財団法人野口英世記念会は、野口家との協議の上、生家を野口英世記念会の所有とし、傷んでいた土台を取り替え、建物を補強しました。また、茅葺き屋根を保護するためトタン葺きの上屋で屋根全体を覆いました。

しかし、第二次世界大戦中ならびに終戦後の法人運営の困難な時期には、荒廃が進みました。



茅葺き屋根で覆った生家

その後、国立東京文化財研究所の茂木 曙氏や藤沢 源氏などによる実態調査、復元時の人工木材などの活用に関する研究が行われ、その結果に基づいて、1979（昭和 54）年、文化庁建造物課半澤重信氏の助言のもと、（財）文化財建造物保存技術協会参与澤野 謙氏を設計監督責任者とし、「野口英世博士生家保存修理委員会」が編成されました。1年半の検討の結果、本格的な修復が必要と判断され、1981（昭和 56）年に全面的な解体修復工事が行われました。その際、風雪を防ぐ目的で上屋が設置され、現状の姿となりました。上屋には、防災のためのスプリンクラーが設置されています。

解体工事中に発見された墨書により、生家は 1823（文政 6）年の創建であることがわかりました。野口英世からさかのぼること 4 代前です。



解体復元工事後の生家

この解体修復工事に関する記録として『野口英世博士生家解体修理工事報告書』（財団法人野口英世記念会、昭和 57 年）が出版されています。

茅葺き屋根については、年ごとの劣化や鳥害などがあり、その都度、部分修復を行ってききましたが、2006（平成 18）年から 2009（平成 21）年にかけて全面改修を行い現在に至っています。

なお、2011（平成 23）年 3 月 11 日の東日本大震災に際しては、建物に大きな被害はなく、これまでの保存活動が実を結びました。



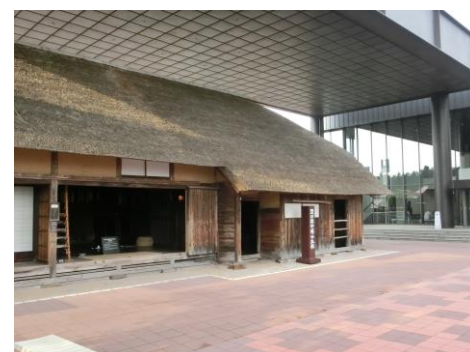
ザシキ・ナンド（座敷・納戸）



オメエ（広間）



ニワ（土間）



生家外観